

戦争を知らない世代へ ㉓ 大阪編

平和への礎

関西高校生120人の聞き書き

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ②

平和への礎——関西高校生120人の聞き書

昭和51年 8 月 1 日 初版第 1 刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5—117823 電話 03(294)8731(代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 星共社

落丁・乱丁本はお取り換え致します

0036—7023—4438

発刊の辞

若き高校生諸君の手によって、編さんが進められていた反戦文集「平和への礎」が、ここに発刊の運びとなったことを、心からお祝い申し上げます。

近年、毎年のように反戦意識の風化が叫ばれ、あるいはマンネリ化した運動のあり方が種々取り沙汰されているだけに、本書の発刊が、反戦平和への一つの礎石となることを確信する。

現在の日本は、老人社会云々の一方で、戦後世代が大きくふくれあがっているのが実情である。それだけに、あらゆる面で世代間のひずみが生じているのも事実である。しかし時代がどのような変わろうと、平和への姿勢だけは断絶があってはなるまい。その意味で、この両者をつなぎ「平和希求」の心を両親や近隣の人びとから聞きとった本書の価値は大きいといえるだろう。

直接、編さんに携わった高校生は二十人余のことだが、学業の合間をぬって懸命に取り組んでいる姿には、何度か心打たれたものである。慣れない作業のため、苦勞が多かったであろうことは想像に難くない。それ故に、まだまだ至らぬ点も多いが、若き鳳雛の心を汲み取り、どうかご容赦願いたい。

聞くところによると、本書をまとめるにあたり、集めた原稿は、千枚近くにもなったという。本書に納められたのは、そのなかのほんの一部ではあるが、原稿を書いた当人はむろん、語部かたリベとなつた人びとの心に改めて戦争の悲惨さ、残酷さと呼び覚ましたことだろう。

平和運動は、派手さよりも実はこうした一人ひとりの心のなかに、平和の砦を築くことが、地道なようだがもっとも近道といえまいか。

本書を一読すれば、『武勇伝』ではなく、燃えるような反戦への願いが込められ、つづられていることを知るのである。本書編さんに携わつたメンバーが、生涯この氣持を大切に育て、二十世紀の舞台を開きいくことを心から期待するものである。

昭和五十一年七月三日

創価学会青年部関西青年部長 満田正明

目

次

発刊の辞

●第一章 大阪大空襲

昭和二十年三月十四日	小倉正生	14
父も母も空襲に泣いた	石江浩一	16
広島から大阪へ、そして空襲	玉岡詠恒	18
三月十三日の夜	津田桂次	20
艦載機がきたぞ	小島昭夫	22
B 29は悪魔のように	橋本郁夫	23
お父ちゃんと泣く少女	渡文聖	24
おそすぎた警戒警報	西森友美	26
マヒしてしまった空襲	竹内隆子	28
どこへ逃げても煙と炎	中谷文代	30
三十年前の大阪城公園	日高博文	32
ただ走るだけ	富田成	34
獣が起こした戦争	山川博樹	35

母は空襲、父は魚雷に………	池田三樹	36
炎の大阪とともに………	細川由美	38
川へ逃げた六月七日………	岡田恵美	40
毎日が防空壕………	織田博文	42
大阪駅の空襲………	下小田隆雄	44
空襲警報が鳴り響いて………	森本真也	46
焼夷弾をうけた僕の家………	片山雅之	48
B 29に食物も絶たれて………	大塚晴弘	50
空襲と食糧不足の日々………	藤永智子	52
虫けらのような生命………	中村順一	54
朝鮮の人びとに助けられた母………	沢井久栄	56
田舎からタンポポが消えて………	田川高士	58
終戦直前の空襲………	佐藤正一	60
死んだ恵ちゃん………	近藤行弘	62
祖母と叔母の体験………	武井富士雄	64
今のような戦争体験………	長野正人	65

空襲直後の堺に思う……………	中橋 泰	66
大阪を追われて集団疎開……………	藤原将純	68
掘っ建て小屋に思うこと……………	上村道宏	70
夫と長男と次男を亡くした祖母……………	中前 進	72

●第二章 戦禍に哭いた父や母

祖父と日本と戦争と……………	難波英一	74
父の軍隊生活……………	三原妙子	76
地獄のガダルカナル……………	戸板欣也	78
どこもかしこも戦場だった……………	伊藤敏明	79
まるで人形のように……………	音成 昇	80
心で泣いて万歳を……………	田中和幸	82
満州の地で……………	福 英司	84
八千四百キロも歩いた父……………	宮代千里	86
ゴツゴツした親父の足……………	明松一彦	88
ハルマヘラ島……………	乾 順子	90

踏みつぶされた死体	山内 実	92
軍隊で笑いは禁物	山田政男	94
腐った残飯	崎田守規	96
右足のない父	東 善美	98
思いもよらぬ命びろい	田中敏春	100
伯父の傷痕	横井妙子	102
怒りの墓碑	渡辺春彦	104
戦地も内地も悲惨だった	糸川啓子	106
朝鮮で知った敗戦	新川智子	108
朝鮮から引揚げる	港 悦子	110
シベリアの独房	伊達 悟	112
思想と戦争	吉成省二	114
明石の航空機工場にいた母	島淵敏広	116
ゴキブリの生活	小川直一	118
すべてを狂わす戦争	中原修次	119
苦しみばかりの時代	柳川記成	120

小学生で弾丸づくり……………	万代順一	122
紙一重の生と死……………	喜納久美子	123
大人の二の舞いはしたくない……………	三笠新一	124
だれも知らない……………	辻井八重子	126
被爆して死んだ祖母……………	加登康司	128
原爆の恐ろしさを知る父……………	谷沢孝子	130
B 29 が二機……………	橘高 稔	132
原爆の朝……………	久保重夫	133
今日も生きていられるか？……………	浦崎久雄	134
僕は人間でいたい……………	尾尻和彦	135
校庭で焼く死体の黒煙——高知空襲……………	福留英嗣	136
灰色の青春……………	大山義晃	138
特攻隊に志願して……………	垣東淑子	139
はてしなき食糧難……………	打越雅章	140
食糧難には親子も他人……………	吉川雅広	142
担任の先生と空襲……………	福田英二	143

家を焼かれて疎開して……………西 道子

母の傷痕……………北 吉 清

家が灰になって―神戸空襲……………石村宗一

炎のなかを逃げ回り―東京大空襲……………村下俊成

私はその時五つの少女……………岡本京子

三頭の象―だれが彼らを殺したか……………白井彦次

授業のかわりに開墾作業……………吉村恭子

食糧難に争って……………米沢省三

暗く苦しかった戦後……………小松百合子

勝利と敗北……………芦田陽子

軍需工場で育った母……………西条隆志

●第三章 私たちが考える戦争と平和

おいノ戦争……………西田真一

戦争の根底にあるもの……………栗塚博巳

人間革命は平和の原点……………金銅俊正

被爆二世の彼女は死んだ……………	中東しのぶ
ぬるま湯のような僕らの日常……………	岩村 裕
冷たい眼……………	木村 旨妙
『海軍特別年少隊』をみて……………	植本道広
平和への鍵……………	山下美佐子
ニセの平和にだまされるな……………	小川 俊隆
過去と現在……………	馬場 孝司
原爆を投下した心……………	藤原 喜子
「東京裁判」の疑問……………	猪谷 隆剛
狂育から教育へ……………	愛洲 京子
ベトナムとアメリカ……………	近藤 潤一
戦争はなぜ絶えないか……………	奥山 泰介
戦争よ死ねノ……………	斎藤希代美
僕らは戦争を知らない……………	宇都宮雅幸
『血で書かれた言葉』より……………	高井 泉
ベトナムの報道写真から……………	梶 毅一郎

この世の悪魔……………	根津倫哉
『広島のことろ——二十九年』より……………	安達美代子
平和の火……………	飛弾千晴
最大の悪魔——原爆……………	川口富士夫
悪魔の産物……………	本田尚子
原爆資料館を各地に……………	戎谷 猛
原爆の無脳児……………	谷 喜美代
戦争は狂ってる……………	荒木伸子
日本国憲法について……………	野田晋司
人間、この恐ろしきもの……………	桜井美也子
被爆二世……………	大西文代
人類滅亡の日が……………	津田善正
知能を变革せよ……………	肥後道博
沖縄に平和を……………	武島秀吉
人間が人間を食べる……………	富山潤子
『きけわだつみのこえ』に思う……………	檜 篤史

戦う平和主義……………	門野成志	210
国家を越えて……………	木ノ下勝也	211
平和の砦を心に築け……………	村岡正敏	212
世界よ一つに……………	森下嘉三	213
平和への旅立ち……………	森脇美智子	214

あとがき

第一章 大阪大空襲

昭和二十年三月十四日

小倉正生（長尾高校）

僕たち高校生は、いわゆる戦争を知らない世代である。しかも、戦争への関心は低いように思う。今の日本の社会は戦争を実際に経験した人が中心になっていて、戦争をはじめようものならたちまち強い世論の反対にあうだろうけど、そのさき僕たちの社会になったらただ反戦のムードが高まっていくか、疑問になってしまう。以上のようなことを、友人のお母さんに戦争体験を聞いた僕は生まれてはじめて考えたのである。

「あなたたちと同じ年ごろだった私たちは、忌むしいあの日を一刻も早く忘れてしまおうと何度思ったことかしれません。でも、忘れようにも忘れられないのです」と、そのお母さんは次のように語ってくれた。

「昭和二十年の三月十三日から十四日の未明にかけ大阪は大空襲されたのです。卒業式を明日にひかえ、胸をおどらせながら床についた私の耳に、例のごとく空襲警報のサイレンが響きました。反射的に防空壕へ避難したのですが、なんだかいつもと様子がちがうのです。それもそのはず、ラジオは関西地区への敵機侵入を告げたのです。こうして大阪大空襲ははじまりました。

それこそアッという間に、あたり一面は火の海と化しました。防空壕にいたのでは焼け死ぬの